

第三部 西亞

第一章 總論

地理

亞細亞大陸の内、裏海カスピヤと亞刺爾海アラビアとの南方、葱嶺ヒマラヤと印度河との西方に位する土地を、總稱して、假に西亞と云ふ。

西亞の事變は、西洋歴史に屬するここ多くして、東洋歴史に屬するもの少し。故に、茲には、省略を旨とせり。

古來、此の土地の全部、又は大部を統一したる邦國、及び人種は、次の如し。

- 一、前バビロン國
- 二、アツシリヤ國
- 三、後バビロン國
- 四、波斯王國

古來之大國

五、アレキサンデル歷山大王

六、歷山大王の將セリウカス並に其の子孫

七、回々教徒

八、土耳其人トルコの一派セルジュツク人種

九、蒙古人

十、土耳其人の一派オットマン人種

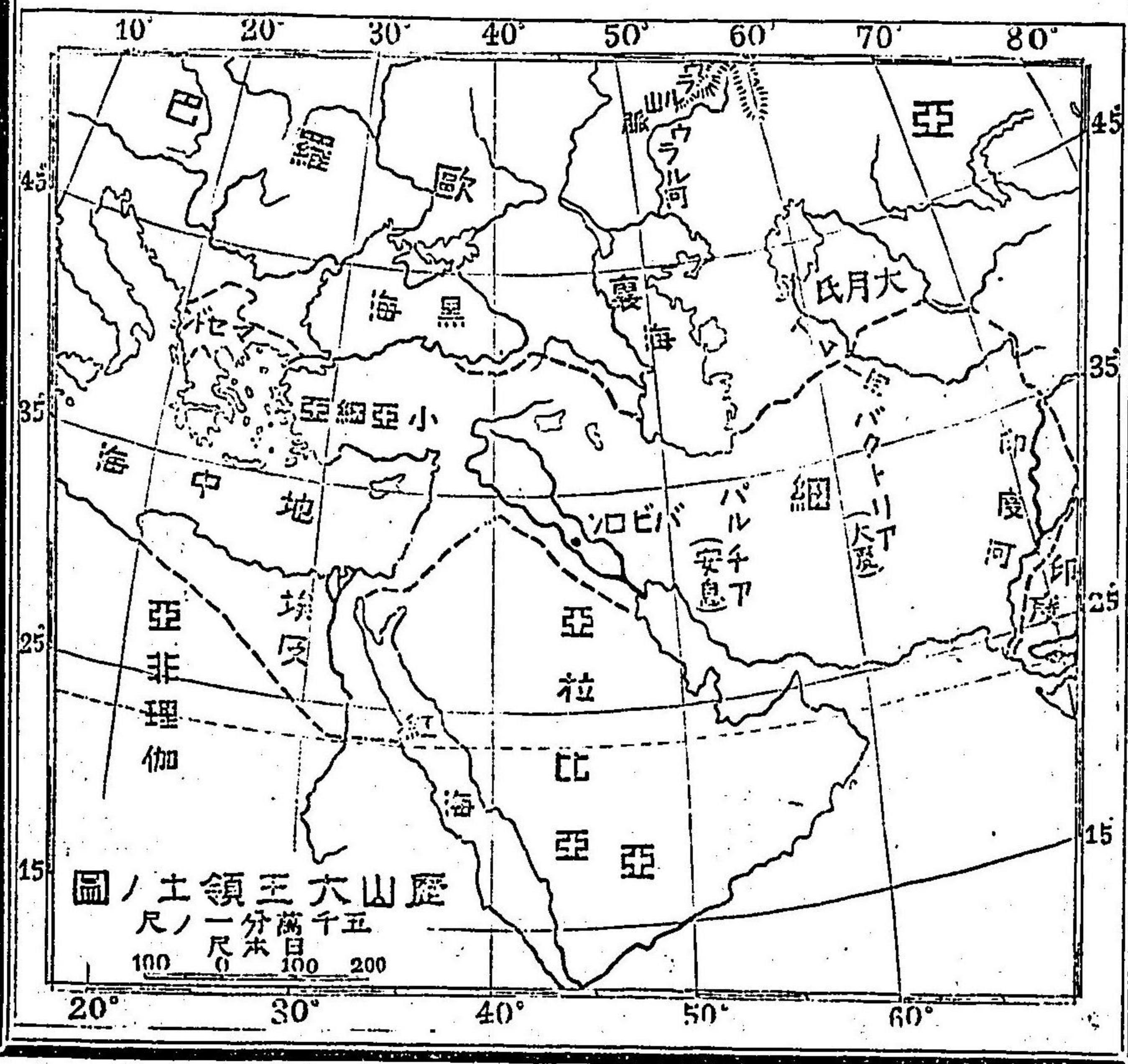
第二章 歷代の統一國

波斯王國、及び其の以前の事は、茲に記す要なければ、之れを略す。

歷山大王

歷山大王は、初め歐羅巴のマセドン國の王なり。マセドン國は、希臘の北方に在り。大王の父は、希臘を攻めて、其の地を取る。大王は、其の國人と希臘人とを率ゐて、亞細亞に入り、波斯

を亡ぼせり。歐羅巴人にして、亞細亞を征服したるは、大王を初とす。大王幾くもなくして卒す。(西紀前三二三年)。其將セリウカス、代りて波斯の故地に主となる。セリウカスの子孫、勢力を失



ふに至り、西亞にバクトリア國、バルチア國興る。支那史に大夏と稱するは、バクトリア國にして、安息と稱するは、バルチア國なり。西紀前一三〇年頃、即ち西漢の武帝の代、支那人始めて此等諸國を視察せり。

回々教徒は、亞拉比亞人にして、マホメットの教を信ずる者なり。此の教徒は、西紀後六二二年を以て、其國の紀元とす。回々教は、耶蘇教と同じく、猶太教より出でて、一神を奉ずる宗教なり。此の教徒は、宣教と征伐とを事とし、遂に大國を成す。亞非理伽の北部諸國、歐羅巴の西班牙、亞細亞の西部全體、其の領地となる。

セルジュク人
蒙古人

西紀後十一世紀に、土耳其人種の一派セルジュク人種、西亞に勃興して、西亞の回々教國を亡ぼす。

西紀後十三世紀の初、蒙古に偉人物あり、鐵木眞と云ふ。西洋

鐵木眞

史に謂はゆるザンギス、カンなり。鐵木眞より數世の間、支那、印度、西亞諸方、歐洲東部は、皆其の所領たり。蒙古人は、初め、シヤメイ教(即ち拜鬼教)を奉じ、後、喇嘛教(即ち佛教の一派)を奉じ、他方に於ては、回々教を奉ぜり。

タメルラ

鐵木眞の大國は、數世相傳へたる後、四分五裂せしが、西紀後十四世紀の末、其の後裔にタメルラン(帖木兒)といふ者あり。英傑にして、祖業を復興し、其の領地、東は、萬里の長城に起り、西は、地中海に及び、其の命令は、印度並に歐洲東部に行はる。其の都は、中央亞細亞のサマルカンドなり。

オットマン人

西紀後十三世紀の末、土耳其人の一派、オットマン人種は、裏海の北方に在りしが、蒙古人の侵撃を避け、西遷して小亞細亞に入る。時に小亞細亞は、一部は、土耳其人の一派セルジュツク人種に領せられ、一部は、東羅馬帝國に領せらる。オット

建國於歐洲

マン人種漸々此の地を蠶食し、遂に、海を航して歐洲に侵入せり。西紀後一四〇二年、オットマン人種は、タメルランに敗られ、小亞細亞は、其の所領となる。

タメルラン死して、オットマン人種、勢を復し、遂に、東羅馬帝國を亡ぼし、コンスタンチノールポル府に都し、國號を建てて土耳其帝國と云ふ。(西紀後一四五三年)。其の後、領地大に加はり、亞非理伽の埃及も、其の有に歸し、東境は、西亞中部のナグリス河に及べり。

四國

西亞には、現今邦國四あり。亞富干、波斯、俾路芝斯坦、土耳其、是れなり。亞富干の北に在る地方は、皆歐洲の露國に屬せり。

露國欲并之

西紀後十七世紀の末、露國に英主出づ。ピーター大帝是れな

第三章 現今の形勢

り、露語には、之れをピョートルと云ふ。大帝は、萬國統一の大志を懷き、土地を闢くこと莫大なり。其の子孫、皆其の遺業を繼ぎ、駸々乎として亞細亞の地を蠶食せり。

英國懼之

西亞に於ては、諸國漸々露國に侵され、土耳其の如きは、地を割かるること多し。露國が、斯く西亞の地を蠶食するに至り、歐羅巴の諸國中、利害の大關係を有するものを英國とす。

英國政略

英國は、十八世紀の中頃以來、大に領地を印度に擴め、十九世紀の中頃に至り、遂に之れを統一せり。故に、英國は、露國の南漸を懼れ、之れを豫防せんが爲め、西亞諸國を援けて、之れが維持に汲々たり。

中立之地

亞富干の地は、英露二國が、互に兵を出だして、覇を争ふこと久かりしが、西紀後一八八五年に至り、二國は條約に依り、此の地を局外中立と定め、以て争根を絶てり。

俾國亡

西紀後一八三九年、英人、俾路芝斯坦の國都キラットを攻む。其の政府を以て、露國に私する所あり、こしたればなり。翌年、英人、復たキラットを攻む。其の後、英人、變亂に乗じ、益々横恣を逞うして、漸々其の土地を割かしたたり。是に於て、國王は、僅に、國內の一隅地を守り、國家を擧げて、其の保護の下に置けり。現今、英國、之れに給するに、年々若干の金圓を以す。

第四部 南亞

第一章 總論

諸國

南亞は、印度、緬甸、東京、安南、東蒲寒、交趾、暹羅、海峽居留地の諸地方を包括す。

此等諸地方の事變にして、記憶すべきものは、東西航路の開通せし後に屬す。其の以前の事にして、吾が國民に關係あるは、獨り佛敎の事のみ。

兩洋間之航路始開

東西航路の始めて開通せしは、西紀後一四九八年の事なり。航路の開通者を、葡萄牙人バスコ、ダ、ガマと云ふ。

歐人東侵

航路開通の後、歐羅巴の諸國人相競ひて東洋に渡來し、領地を開設するに急なり。其の貪慾なる、機會の乘ずべきあらば、其の何國たるを問はざるなり。時に、其の存立に力を效せる

が如きは以て、領地の藩屏とせんが爲なり。

第二章 印度

(一) 古代

歷山大王

古代、歐羅巴人にして、初めて印度に入り、其の情況を視察せし者を、マセドンの歴山大王とす。大王は、西亞を征して、之れを統一し、其の餘力を以て、印度に臨む。然れども、兵士深く入るを願はず。大王、乃軍を還へせり。(西紀前凡三三〇年頃)

支那人

支那人が、始めて印度を知りしは、西紀前一三〇年頃(即ち西漢の武帝の時)の事なり。

東西相通

歐羅巴と印度との間に、海上の交通開けしは、西紀後一四九八年なり。

白人

印度古代の文物は、白色人種の一派、アーリアン人が興した

宗教

四民

佛教

る所なり。アーリア人は、西紀前二千年頃此の地に入り、諸方に割據したり。

印度古代の文物中、最も著明なるものを宗教とす。宗教に四種あり、韋陀教、波羅門教、佛教、印度教、是れなり。韋陀教は、最古の教にして、萬物皆神の主義を唱ふ。

波羅門教興るに及び、人民を分ちて、四階級とす。四階級とは、一に波羅門、二に釋諦羅、三に吠舍、四に戒陀、是れなり。波羅門は、宗教と學事を司り、釋諦羅は、政事と戦事を專にし、吠舍は、商工の二業を営み、戒陀は、耕作、牧畜、雜役に従事す。此の階級制度は、門閥を重んじ、人材を輕んじたるが故に、甚しく弊害を生ぜり。

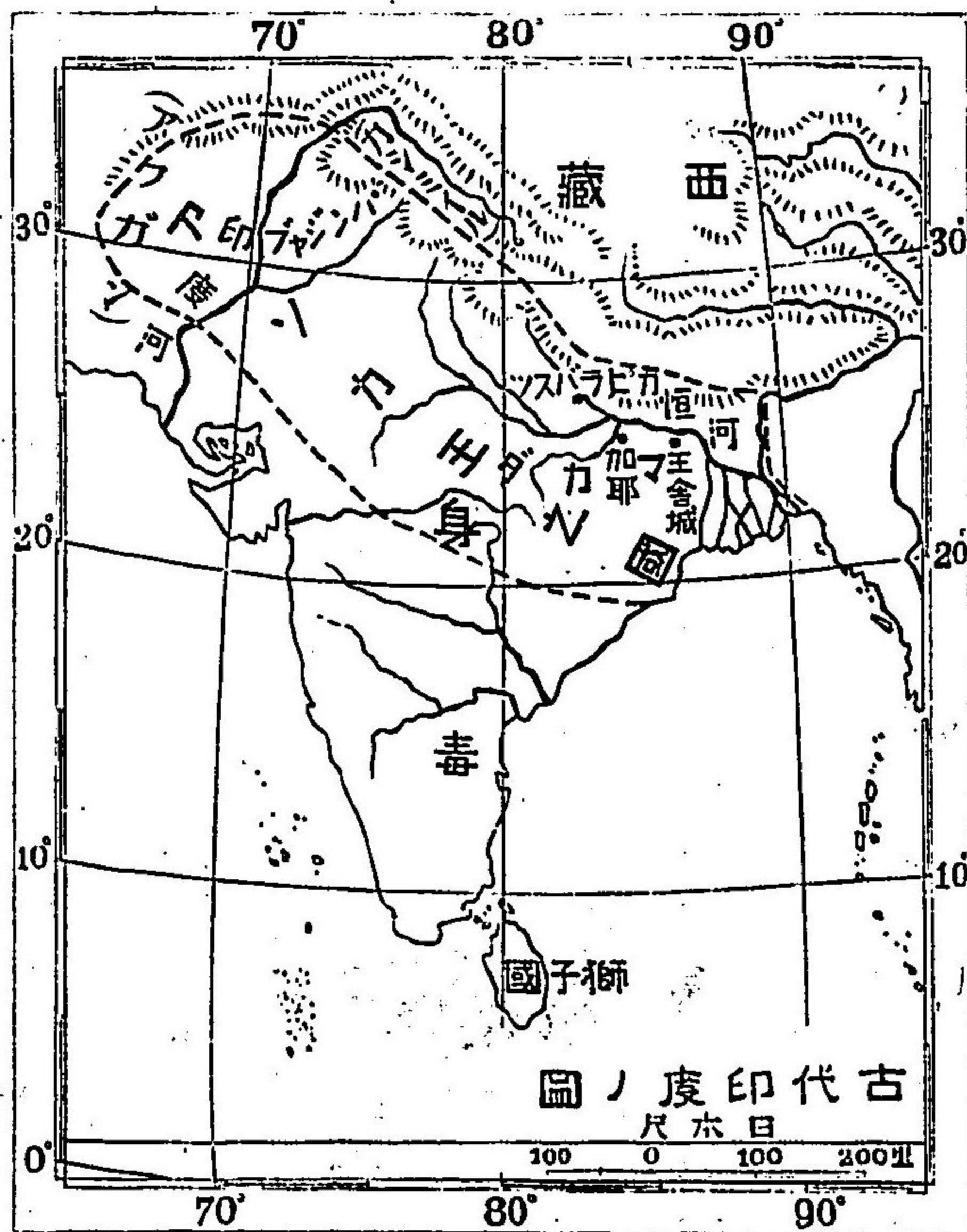
佛教は、平等の主義を採り、寂滅の玄理を説き、因果應報の説を立つ。其の教祖を瞿曇、即ち釋迦牟尼と云ふ。釋迦牟尼は、中

印度教

マガタ國

印度のカピラ城主の子なり。其の出生の年月明かならず。一説に、西紀前六百年頃なりといふ。最後に興りて、佛教と波羅門教との混化より成れるものを、印度教とす。

歴山大王の死後、其の將セリウカス、波斯の故地に君臨し、東進して印度を略取せんことを、時に、印度のマガタ國の王を、ナ



古印度圖
尺六日

ヤンドラ、グプタと云ふ。王、性資英邁なり。初め、變亂に乗じて起り、先づ、マガタ國を定め、次に、諸方を鎮め、其の領地、終に、北印度、西印度、中印度に跨れり。セリウカス、之れと相戦ひて勝たず。乃相和し、印度河を以て境界とせり。

アソカ王

ナヤンドラ、グプタの孫アソカは、武功廣大、西侵して、アフガンを略す。而して、大に佛教を中央亞細亞に弘布せり。然るに、其の王朝即ちモーリヤ王朝は、其の死後、幾くもなくして亡ぶ。アソカの死は、西紀前二五〇年頃の事なり。

二王朝

モーリヤ王朝亡びて後、相續てマガタ國に起りたる二王朝を、サंगा王朝、カーンバア王朝と云ふ。此の二王朝も、亦た、厚く佛教を信じたり。

アンドラ
王朝

時に、南印度に強大の王朝あり。アンドラ王朝と云ふ。南印度を一統し、中印度を略取す。西紀前二十五年、マガタ國も亦た、

爲に亡ぼさる。

アンドラ王朝の時、波羅門教、勢力を復し、佛教と拮抗し、佛教は、終に勢力を中印度に失ひ、獨り北印度に行はれたり。これ、侵入せる人種月氏が、之れを信奉したるに依る。

月氏

月氏は、初め支那の天山南路に在りしが、後に、アムー河(媯水)の附近に移住し、國號を立てて大月氏國と云ふ。西紀後一世紀に至り、其勢力甚だ大なり。今日のアフガン、ヘルナスタン、並に印度の西北兩部、皆な其の占領する所となる。時に、其の國主カニシカは、厚く佛教を信じ、盛に其の弘布を計る。此に於て、佛教大に北印度並に中央亞細亞に行はれたり。

グプタ王
朝

西紀後三九〇年頃、一新王朝、北印度に興る。其の名をグプタ王朝と云ふ。勢力大に振ひ、子パール、セイロシ等の君長、之れに賓服し、月氏の種族、爲めに、印度より逐はる。

黄金時代

西紀後五二〇年以後、凡百五十年間は、謂はゆる印度の黄金時代なり。此の時代の初め、北印度のウヰンジャーナに大豪傑出づ。ピクラマヂナヤミ云ふ。西印度、北印度、中印度を併呑し、大に文物制度を興す。其の後、又二英主あり。一にシラヂナヤ一世と云ひ、二にシラヂナヤ二世と云ふ。シラヂナヤ二世は、此の時代の末に出で、盛に學藝を獎勵し、大に佛教を弘布す。王は、支那の唐の太宗の時に當り、之れを使を通ぜり。西紀後六四八年、唐の太宗、兵を發して印度を撃つ。將を王元策と云ふ。王元策、大に威を輝して東歸す。

新種族

此の頃より、印度は、四分五裂して統一せず。特に、西印度には、新種族興る。其の名をラヂヤプトと云ふ。月氏及び其他の印度外の諸族の混淆せるものなり。此の種族、漸く勢力を加へ、終に、西印度を占領す。此の際、佛教衰へ、新教(即ち印度教)興る。

(二) 中代

侵略者相
踵而來

西紀後七世紀より、同十七世紀に至る間、印度は、回々教徒、數回侵略して、其の割據する所となり、十七世紀後に至りては、歐羅巴人の侵略する所となる。回々教徒の人種は、亞拉比亞人、土耳其人、亞富千人、波斯人、蒙古人なり。歐羅巴人は、葡萄牙人、和蘭人、英人、佛人なり。

タメルラ

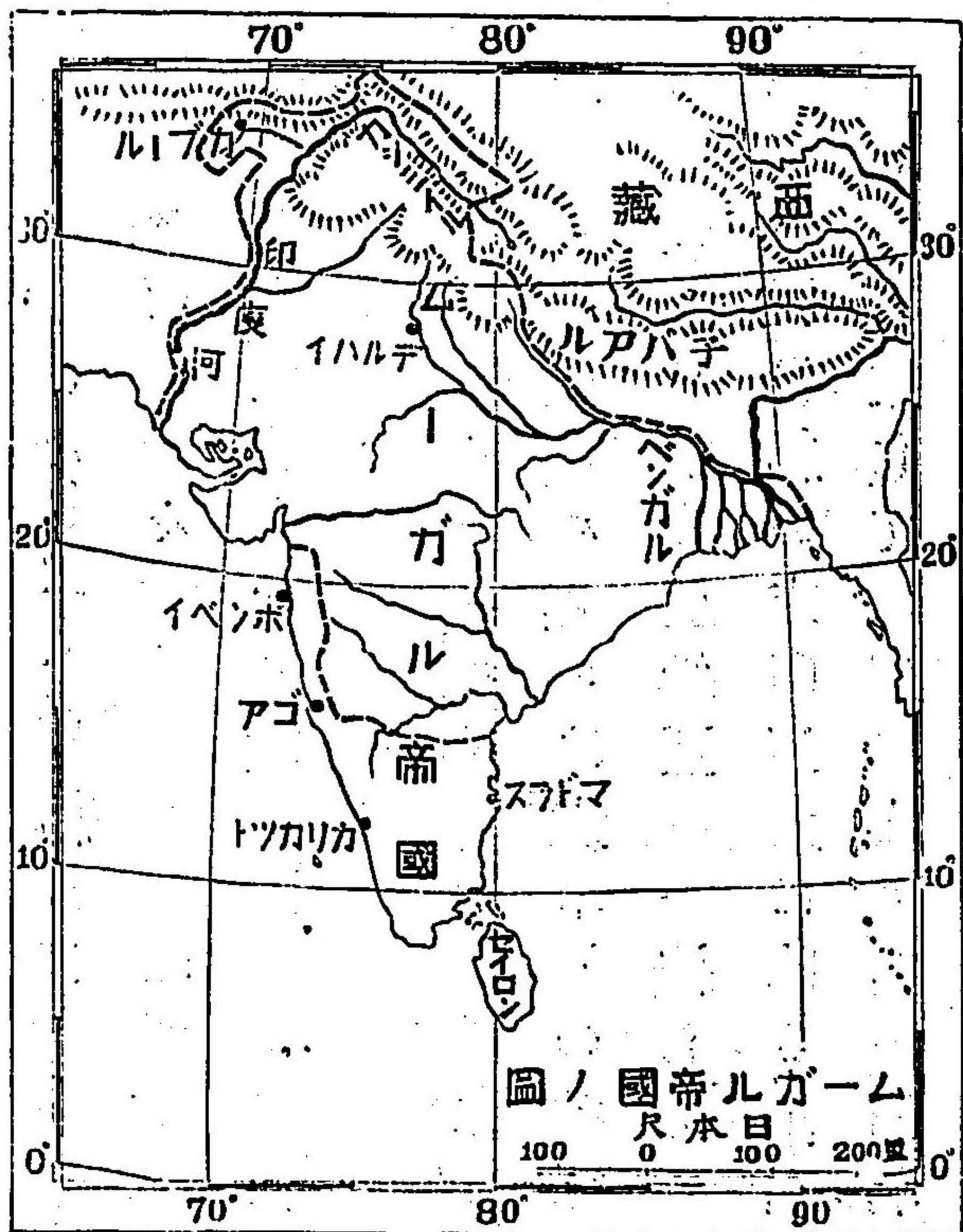
蒙古人の侵略中、最も著明なるは、タメルラン(一名帖木兒)の侵略、並にババルの侵略とす。タメルランは、鐵木眞の後裔、ババルは、タメルランの玄孫なり。中央亞細亞を一統して、サルカンドに都す。西紀後十四世紀の末、印度大に亂る。西紀後一三九八年、タメルラン、亂に乗じて、印度に入り、其の西北部を服す。其の支那に寇せんとして去り、後、印度復た大に亂

ババル

る。西紀後一五二五年タメルランの支孫ババル、印度に入り、大國を建つ、是れ謂はゆるムーガル帝國なり。ババルの支孫アウラングゼブ、印度の中部を取り、勢威大に振ふ。

ムーガル帝國衰

西紀後一七〇七年、アウラングゼブ死す。其の後、ムーガル帝國衰微し、諸侯離反し、群盜蜂起し、蠻族入寇す。此の紛擾は、英



人に印度を統一する機會を與へたり。

(三) 近代

歐人相踵而來

歐羅巴人の印度に來りたる者、商利を收め、領土を開くを目的とす。其中、最初に印度に來りたる者は、葡萄牙人なり。次は、和蘭人なり。其の後、英佛二國の人來る。葡萄牙人は、和蘭人との競争に敗れ、和蘭人は、英人との競争に敗る。而して、英人は、佛人との競争に打勝てり。

英人

英人は、佛人を取りたるのみならず、印度の諸侯を壓倒し、印度の曠原を一統せり。印度一統の大業に與りて、大功ある者二人あり。クライブ、ヘスタンクス是れなり。二人、共に、英人施設の印度商會の頭取なり。

クライブ

西紀後一七五七年、クライブは、プラッセイ原に、印度人の大

軍を敗る。此より後、印度の主權は、漸々英人所設の印度商會に歸す。

印度爲英領

十九世紀の中頃に至り、印度の諸地方、殆ど英人の吞併する所なりしが、印度人は、宗教上、英人の所爲を惡み、其の治下に在るを願はず。西紀後一八五七年、遂に反せしが、鎮定せられき。西紀後一八五八年、英人、有名無實のムーガル帝國を倒し、印度統治の權を、印度商會より、英國女王に移す。西紀後一八七七年、英國女王は、印度女帝の尊號を加ふ。

第三章 緬甸並に海峽居留地

三國

緬甸は、支那の元明二朝の時、其の屬領となる。明の末、此の地分裂して、三國となる。

緬甸爲英領

三國、相互に吞併を事とせしが、終に、一統の王國となる。最末

海峽

王、英人と戦て敗れ、償金を出だして和す。後、又英人の侵攻を被り、身捕はれ、國亡ぶ。西紀後一八八五年の事なり。
海峽居留地は、マレー半島の南端にあり。初め、英人所設の印度商會、之れを領せしが、西紀後一八六七年、同商會、之れを英國政府に獻せり。

第四章 東京、安南、東蒲寨、交趾

諸國

東京、安南、東蒲寨、交趾と稱する地方は、上古、支那人先づ、交通を開きたり。其の年代は、周の代なりとも云ふ。此の地方、邦國の興亡、頻繁にして、一々、記すに堪へず。要するに、支那の歴史は、此の地方を以て、其の屬國と視做せり。

佛人

西紀後十七世紀の頃、南亞に、東蒲寨、交趾、安南、東京など稱する邦國あり。此等の邦國、外には、相吞併し、内には、變亂多かり

き。佛人時に或は弱者を助けて、強者を撃ち、時に或は、名を違約に藉りて、討伐をなし、時に或は、國亂に乗じて、侵略を逞うせり。十八世紀に至り、此等の邦國、皆自立する能はず。或は、佛の領地となり、或は、佛の保護國となる。是に於いて、此の地方には、佛人勢を振ひ、清國、覇權を失へり。
佛國は、西紀後一八六一年、交趾を所領とし、同一八六二年、東蒲寨を保護國とせり。同一八八四年には、東京を領地とし、安南をば、保護國とせり。

第五章 暹羅

暹羅位置

暹羅は、近隣諸國に比して、歐羅巴人の侵略を被りしこと少し。其の西隣には、英國の屬國、緬甸あり。其の東隣には、佛國の領地、東京等あり。故に、英佛二國、各、其の領地を全うせんが爲

日本人

英人

明君

め、この國をば、互に藩屏として、其の存立を望めり。
支那人が、此の地に通じたるは、隋の時にして、支那の歷朝は、之れを屬國とせり。西紀後十六世紀には、日本人、多く移住して、商業に従事し、其の中、或は國政に預りたる者もあり。
西紀後十世紀の末、並に十八世紀の初、此國、英人の攻むる所となりしが、西紀後一八五六年、之れと通商修好の條約を結び、外寇の憂慮を絶つ。
西紀後十八世紀の末、今の王朝起る。歷代の王、皆隣國の君主に比して賢明なり。今の王の父は、博學多藝にして、宇内の形勢に通じ、在位の時、大に庶政を改め、國家の根柢を固くせり。其の名をマハ、モングクトと云ふ。西紀後一八六八年に死せり。

第五部 北亞並に南洋

第一章 北亞

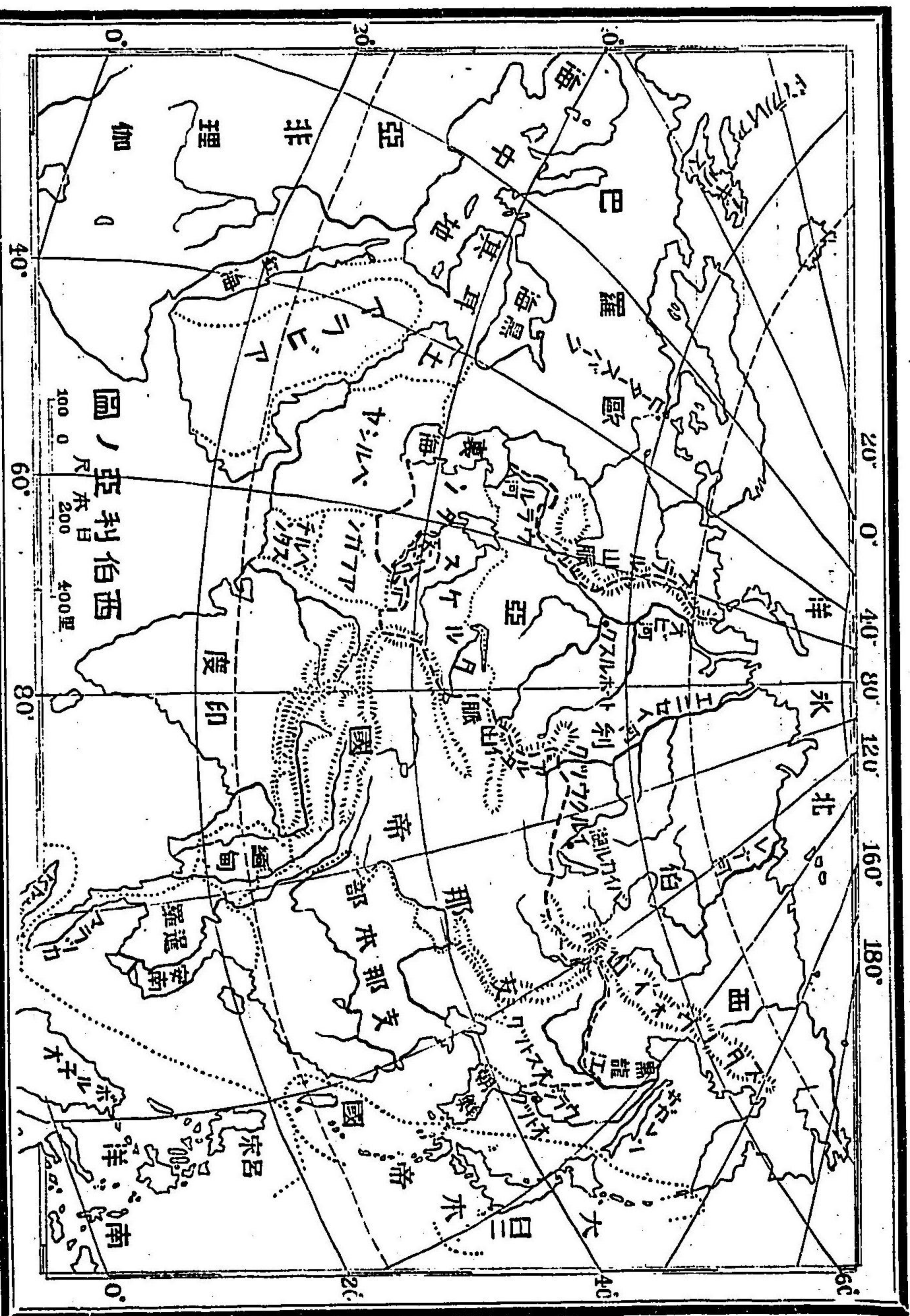
西伯利亞

亞細亞の北部、曠漠極寒の地、之れを稱して、西伯利亞云ふ。

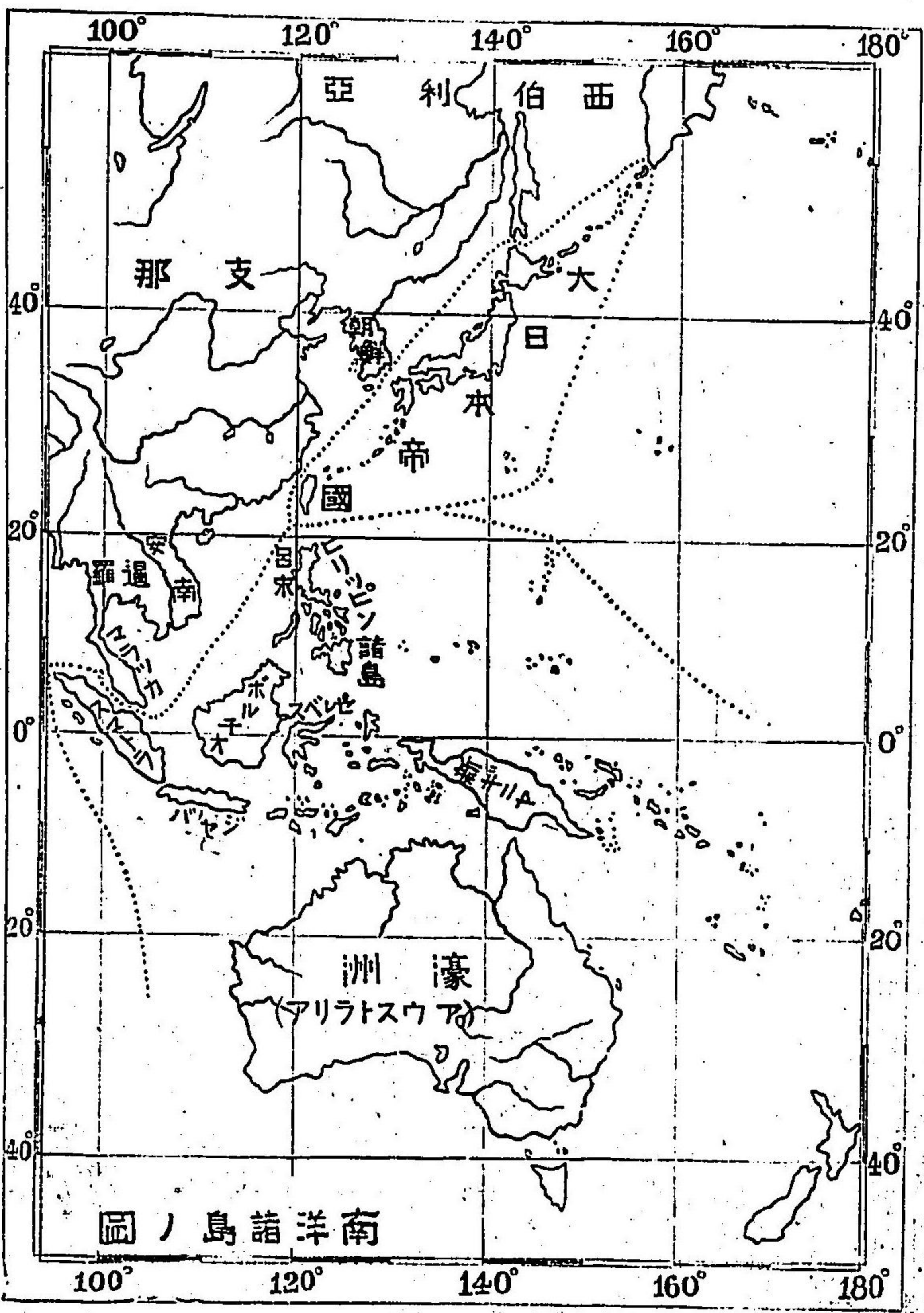
此地近代迄、歴史に載すべき事變なかりしが、西紀後十六世紀の末、露國、之れを領して後、漸く史上に表はれたり。西紀後一五八一年、露國の領地、コサツク部の酋長イルマク、衆を率ゐて、西伯利亞に入り、諸蠻族を征服して、其の土地を略取し、之れを擧げて、露國に獻ぜしより、露國、此の地を有するに至れり。

露清相定
國境

西紀後十七世紀の末、即清朝の聖祖の時、露國に、英主出づ、ピター大帝といふ。大帝の時、露國、既に、西伯利亞の全部を占領し、屢、南進して、清の領土、滿州の北邊を侵す。此に於て、清の



第五部 北亞並に南洋 第一章 北亞



聖祖は、ビーターと約して、黒龍江を以て、清露の境界とし、互

西伯利亞
鐵道

に侵寇するなきに至れり。
露國南漸の志、英の爲に障へられて、容易に、印度洋に出づること能はず。遂に、西伯利亞不毛の地、數千里を通じて、日本海なる浦鹽斯德に達すべき鐵道敷設に従事せり。この鐵道にして、全通するに至らば、支那、日本、朝鮮等、其の影響を被ること莫大なるべし。

第二章 南洋

濠洲

東西兩洋の間に、航路開通して後、南洋の諸嶋（アウストラリア、ジャバル、ルン等）多くは、歐羅巴人に占領せらる。其の主なる占領者は、英人、和蘭人、西班牙人等なり。此等諸嶋、歐羅巴人に占領せられたる後、東洋の商業に關して、甚しく影響を及ぼせり。

年表

紀元前	西曆	同時代ノ 日本天皇	同時代ノ 支那君主	事	變
二一九〇				夏興る	
一七六六				殷興る	
一一二二				周興る	
七七一				周東遷す	
六八五				齊の桓公起る	
四七九	懿	德	周の敬王	孔子歿す	
四〇三	孝	昭	周の威烈王	戦國の韓魏趙興る	
三八六	孝	安	周の安王	戦國の齊興る	
三三三	孝	安	周の顯王	蘇秦六國の合従を成す	
三二七	孝	安	周の顯王	歴山大王印度に侵入す	
三一	孝	安	周の赧王	張儀連衡を成す	

年表

東洋史略終

此所ノ入ルルナキモノアリヨシ誤トモ見ユ

二六〇	孝	靈	周の赧王	アソカ王即位す
三三一	孝	靈	秦の始皇	秦、支那を併呑す
二〇六	孝	元	秦の三世	秦亡ぶ
二〇二	孝	元	西漢の高祖	西漢、支那を統一す
一五四	開	化	西漢の景帝	吳楚七國の亂
一〇八	開	化	西漢の武帝	武帝、朝鮮を平ぐ
五七	崇	神	西漢の宣帝	高麗興る
紀元後				
八	垂	仁	西漢の子嬰	王莽、天子となる
二五	垂	仁	東漢の光武	東漢の初代光武帝即位す
六七	垂	仁	東漢の明帝	洛陽に佛寺を建つ
二〇八	應	神	東漢の獻帝	赤壁の戰
二六五	應	神	西晉の武帝	晉魏を滅ぼす
三〇四	應	神	西晉の惠帝	劉淵、王と稱す
三一六	仁	德	西晉の愍帝	西晉滅ぶ

三八三	仁	德	東晉の孝武帝	淝水の戰
三九八	仁	德	東晉の安帝	北朝の魏の太祖道武帝立つ
四二〇	允	恭	東晉の恭帝	東晉亡び、南朝の宋起る
四七九	雄	略	齊の高帝	高帝即位す
五〇二	武	烈	梁の武帝	武帝即位す
五三五	安	閑	梁の武帝	北朝の魏、東西に分る
五五七	欽	明	梁の敬帝	梁亡び、陳興る(南朝)
五八八	崇	峻	陳の後主	隋、支那を統一す
六六三	天	智	唐の高宗	百濟滅ぶ
七五五	孝	謙	唐の玄宗	安祿山反す
九〇七	醜	醐	唐の昭宣	唐滅び、五代の後梁起る
九一六	醜	醐	後梁の太祖	契丹の阿保機、帝と稱す
九六〇	村	上	後周の恭帝	北宋興る
一〇〇四	一	條	北宋の眞宗	澶淵の盟
一〇六九	後三條		北宋の神宗	王安石、新法を行ふ

年表

一一一五	鳥羽	北宋の徽宗	女眞の阿骨打帝と稱す
一一二七	崇徳	北宋の欽宗	金人、北宋を亡ぼす 南宋興る
一一〇〇	土御門	南宋の寧宗	朱熹死す
一一〇六	土御門	南宋の寧宗	元の太祖成吉思汗立つ
一一三四	四條	南宋の理宗	金、蒙古に滅ぼさる
一二七四	龜山	南宋の度宗	蒙古、日本に寇す(文永の役)
一二七九	後宇多	南宋の帝昀	蒙古、南宋を滅ぼす
一二八一	後宇多	元の世祖	蒙古復た日本に寇す(弘安の役)
一三六八	後村上	元の順帝	元亡び、明興る
一三六九	後龜山	明の太祖	帖木兒、サマルカンドに都す
一三九九	後小松	明の惠帝	帖木兒、印度を侵す 燕王、兵を起す
一四〇五	後小松	明の世祖	帖木兒死す
一四四九	後花園	明の英宗	土木の變
一四九八	後土御門	明の孝宗	バヌコ、ダ、ガマ、印度に達す
一五二五	後柏原	明の世宗	パバル、印度に起る

一五二九	後奈良	明の世宗	王守仁、死す
一五九六	後陽成	明の神宗	第一回朝鮮役の媾和
一六〇〇	後陽成	明の神宗	英人、東印度商會を立つ
一六一八	後水尾	明の神宗	清の太祖起る
一六三四	明正	明の思宗	清始めて國號を清と云ふ
一六四四	後光明	明の思宗	李自成、自立す
一六五九	後西院	明の永明王	印度の主アウラングゼブ立つ
一六六一	後西院	明の永明王	清、明を滅す
一六七三	靈元	清の聖祖	三藩の亂
一七二四	中御門	清の世宗	世宗、西藏を平ぐ
一七五五	桃園	清の高宗	準噶爾の亂平ぐ
一七五七	桃園	清の高宗	印度のブラシーの戰
一七八八	光格	清の高宗	清、安南を征す
一八二八	仁孝	清の宣宗	波斯、露國に裏海の西岸を讓る
一八三九	仁孝	清の宣宗	鴉片問題起る

王玄策 一九六 王守仁(陽明) 一四一 王羲之 七六 王振 一四二 注直 一四二 王僧辨 七八 王導 六〇、六一 王敦 六〇 王莽 三一 王猛 六四 歐陽修 一二七 窩淵台 一三一 オットマン人 一八六	何后 三七 何晏 四九 回紇 九四、九七、一一八 賈誼 四九 賈后 五四 郭威 一〇六、一〇八 郭子儀 九〇、九七 郭嘉 四〇 海峽居留地 二〇〇、 二〇一 カニシカ王 一九五 廓爾喀 一五八 合従 一三 閩盧 一一 霍光 三〇 桓帝 三五 羯 五六 垓下 二五 郭榮 一〇八 嚙爾丹 一五七	漢 二〇、二六、三四、 四七 漢(蜀) 四三 韓信 二六 韓琦 一一二 韓侂胄 一二三 韓非子 一九 韓愈 一〇二 關羽 三九 桓溫 六一 桓立 六二 管仲 一一 甘露の變 九三 厓山陥落 一二四 樂毅 一四 岳飛 一二〇 顏杲卿 九〇 顏真卿 九〇、一〇二 回々教徒 一六九	箕子 一七二 徽宗 一一五、一二六 欽宗 一一六 毅宗 一四五 契丹 一〇四、一〇六、 一〇九、一一一、 一一七 奇渥溫鐵木真 一二九 匈奴 三三、四〇、五六、 五七 金聖歎 一六九 巨然 一二七 歸昌世 一六九 光 五六、五八 許遠 九〇 キルギス 九八 金 一〇四、一一八、 一二〇、一二三、
---	---	--	---

か

一三三、一三一 魏(東周戰國) 一一一 魏(曹氏) 四一、四五、 四八、四九 魏(拓跋氏) 五二、六五、 七〇 魏忠賢 一四二 魏徵 八六 牛僧儒 九三 岐山 七 堯 三 金城 一七四 キラット 一八九	け 惠帝(漢) 二六 惠帝(晉) 五四 獻賊 一四六 獻帝 三七 景帝(明) 一三九 建業 四三、五一 鄴 四一、五二 桀 五 憲宗 九二、九三 乾隆年間 一五六 月氏 三三 元 一二八、一四九 玄奘 一〇三 玄宗 八八	第二 高麗 一七二、一七六 孔子 一八 孔穎達 一〇二 孔安國 四八 孝公(秦) 一三、二〇 孝文帝 七〇、七一 項羽 二五 康熙年間 一五六 侯景 六九 寇準 一一一 洪秀全 一六三 黃帝 三 黃巢 九五 勾踐 一一 交趾 二〇一、二〇二 高歡 七一 高祖(漢) 二四、二五、 二六 高祖(唐) 七八、七九、	八〇 高祖(五代後晉) 一〇六 高祖(宋) 一二〇 光武帝 三三、三四、四九 江都 八一 顧炎武 一六九 吳(東周戰國) 一一 吳(三國) 三八、三九、 四三、四六 吳起 一九 吳三桂 一四六、一五七 吳世璠 一五八 五代 一〇三、一〇五、 一二五 五帝(三皇五帝) 三 ゴルドン(戈登將軍) 一六三 胡渭 一六九 黃庭堅 一二七 後梁 一〇五
---	--	--	---

索引

<p>大月氏 三三三</p> <p>大秦(羅馬) 四一</p> <p>太祖(元) 一二九</p> <p>太祖(明) 一三五、一三七</p> <p>太宗(唐) 八三、八六、九七、一〇二</p> <p>太武帝(拓跋魏) 七〇、七一</p> <p>大理 九八</p> <p>タメルラン 一八六</p> <p>臺灣 一四八、一六三、一六六</p> <p>鞏鞏 一四五</p> <p>達摩 七六</p>	<p>趙(五胡) 六三</p> <p>趙匡胤 一〇九、一一〇</p> <p>趙高 二四</p> <p>趙普 一一〇</p> <p>朝鮮 一七一</p> <p>長安 二、二〇、七七</p> <p>長髮賊 一六二</p> <p>張載 一二七</p> <p>雞髮の令 一五五</p> <p>沈南蘋 一六九</p> <p>關賊 一四六</p> <p>趙汝愚 一二三</p> <p>長孫后 八六</p> <p>長孫無忌 六八</p> <p>張巡 九〇</p> <p>張飛 四〇</p> <p>張騫 二九、三四</p> <p>張儀 一三、一九</p> <p>張世傑 一二五</p> <p>張良 二六</p>	<p>○ 罷錯 二八</p> <p>陳(南北朝) 六五</p> <p>陳平 二八</p>	<p>唐(五代) 一〇五</p> <p>董仲舒 四八</p> <p>陶淵明 七六</p> <p>東林黨 一四三</p> <p>道武帝 六五、七〇</p> <p>杜預 四六</p> <p>董源 一二七</p> <p>杜如晦 八六</p> <p>杜甫 一〇二</p> <p>杜密 三六</p> <p>吐蕃 九七</p> <p>吐谷渾 九七</p> <p>突厥 七三、九六</p> <p>德宗 九四</p> <p>土木の變 一四四</p> <p>童貫 一一五</p> <p>東京 二〇一</p> <p>東學黨 一八一</p> <p>獨立黨 一七九</p>
--	---	--	--

<p>南京 一三五、一三八</p> <p>南詔 九八</p> <p>南北朝 五〇、六五、七三</p> <p>南洋 二〇七</p>	<p>ナパール 九七</p> <p>馬融 四九</p> <p>裴寂 八三</p> <p>馬后 三五</p> <p>范寬 一二七</p> <p>裴度 九四</p> <p>白居易 一〇二</p> <p>白蓮教 一六〇</p> <p>范仲淹 一一二</p> <p>班超 四一</p> <p>班固 四九</p> <p>馬援 三四</p> <p>馬嵬驛の變 九〇</p> <p>馬關條約 一六六</p> <p>パバル 一九七、一九八</p> <p>パスコ、ダ、ガマ 一九〇</p> <p>バクトリア 一八五</p>	<p>バルチア 一八五</p> <p>馬韓 一七二</p>	<p>一六八、一七一、一七五</p> <p>文宣帝 七二</p> <p>武惠妃 八八</p> <p>富弼 一一一</p> <p>武王(周) 九</p> <p>武帝(漢) 二九</p> <p>武帝(魏) 四〇</p> <p>武帝(梁) 六九</p> <p>武后(則天) 八七</p> <p>文王(周) 九</p> <p>文帝(漢) 二八</p> <p>文帝(魏) 四三</p> <p>文帝(隋) 七九、八〇</p> <p>文徵明 一五一</p> <p>文公(晉) 一一</p> <p>文天祥 一二五</p> <p>文宗 九三</p> <p>回々教徒 一八三、一八九</p>
--	--	-------------------------------	---

沸流 一七四

俾路芝斯坦 一八七、一八九

吠奢 一九二

米菲 一二七

ヘスチングス 一九九

北京 一二九、一五三、一六一、

波斯 一八二

平壤 一七四

辨障 一七二

蒲洪 五八

慕容廆 五八

慕容光 五八

龐統 四〇

方國珍 一三五

胃頓單于 三三

葡萄牙人 一九九

和蘭人 一九九

香港 一六一

墨子 一八

穆公(秦) 七一

渤海 九八、一七五

卜赤 一四五

豐璋 一七五

み

任那 一七四

む

ムールガル帝國 一九八

め

明帝 一二五

も

盟津 七

孟子 一八

蒙古人 一〇三、一二三、一二九、一八五

モリヤ王朝 一九四

や

耶蘇教 一〇三、一六三

耶律楚材 一三一

耶律阿保機 一〇九

よ

陽明學 一五二

姚崇 八八

姚弋仲 五八

姚襄 六一

楊雄 四九

楊貴妃 八九

楊震 七八

楊堅 七八

楊榮 一三八

楊溥 一三八

楊士奇 一三八

ら

羅什 七六

洛陽 二、二〇、五一

喇嘛 一六九

李克用 九五

李存勖 九五、一〇六

李斯 二四

李自成 一四六

李靖 八六

李世勣 八六

李宗閔 九三

李德裕 九三

李白 一〇三

李膺 三六

劉邦 二五

劉秀 三三、三四

劉淵 五七

劉總 五七

劉曜 五八

劉裕 六三、六五

劉父靜 八三

劉豫 一二〇

劉基 一三七

劉瑾 一四二

ろ

老子 一八

露西亞 一六二、一六七、一八一、二〇四

老上 三三

魯肅 四〇

呂蒙 四〇

呂夷簡 一一二

わ

王仁 一七五

和帝 三五、四一

わ

韋后 八八

韋陀教 一九二

左の文を一七〇頁に入る

(五)内地漸開

近時に至り、支那は歐洲諸國に迫られ、漸く内地を開放して富源を發す。沿海の航業、礦物の發掘、鐵道の布設は、諸國が相争て特權を求むる所なり。(獨國は、一八九七年膠州灣を占領し、翌年其の借地權を得、以て商工業の根據地を開き、尋で露國は旅順口を借用し滿州鐵道布設の權を得、英國は威海衛を借用して従來の便宜を倍益し、佛國は廣州灣を借用し東京鐵道延長の權を得たり)。

左の文を二〇八頁に入る

フィリピン群島は、初め西國の領地なりしに、一八九八年西國は米國と戦争の結果、之れを米國に割讓するに至れり。然れども、内亂起りて、今尙ほ鎮定に至らず。布哇は、一八三三年獨立王國となり、大に移住民を招きしが、一八九三年革命起り王政仆れ、翌年共和政府立ち、一八九八年米國遂に之れを併せたり。

六二頁三行、三行、六三頁八行、六四頁六行、七行、九行、十一行、十二行、六五頁一行、一七五頁十二行に於ける符號は、特權の誤なり。

示指定檢省部文
表誤正略史洋東

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
九四	二	回紇	回紇	一九六	九	王元策	王元策
九〇	一	王叔	李叔	一九〇	〇	東蒲塞	東蒲塞
八〇	三	杜谷澤	吐谷澤	一八〇	〇	十九年	十八年
七六	九	王義之	王義之	一七九	三	九年	八年
七五	二	謝靈運	謝靈運	一七四	二	平壤	漢山
六〇	二	桓玄	桓玄	一三三	一	楊海	楊海
五八	七	弟	特の子	一〇七	〇	興せし	興し
五七	一	三九六年	二七〇年	一〇七	〇	滅ひ	亂れ
四九	四	楊雄	揚雄	〇九	三	匡山	崖山
四八	八	丞相	丞相	〇九	四	嶺州	嶺洲
四六	七	海軍	水軍	〇七	二	黃旗	黃旗
二五	七	李叔	李叔	〇四	二	西紀後	西紀後
二三	七	匈奴	匈奴	〇四	二	突厥	突厥
一九	七	季	季	九七	六	李克用	李克用
一七	二	觀公	觀公	九六	六	李克用	李克用
一五	欄外	五代	六代	九五	五		

明治三十三年二月四日印刷
同三十三年二月八日發行

東洋史略
定價金六拾五錢

著者 辰巳小次郎

發行兼印刷者 金港堂書籍株式會社

東京市日本橋區本町三丁目十七番地

右社長

代表者 原亮三郎

東京市下谷區龍泉寺町四百十番地

帝國印刷株式會社

東京市京橋區築地三丁目十五番地

各府縣下特約販賣所



賣捌所

印刷所

代表者

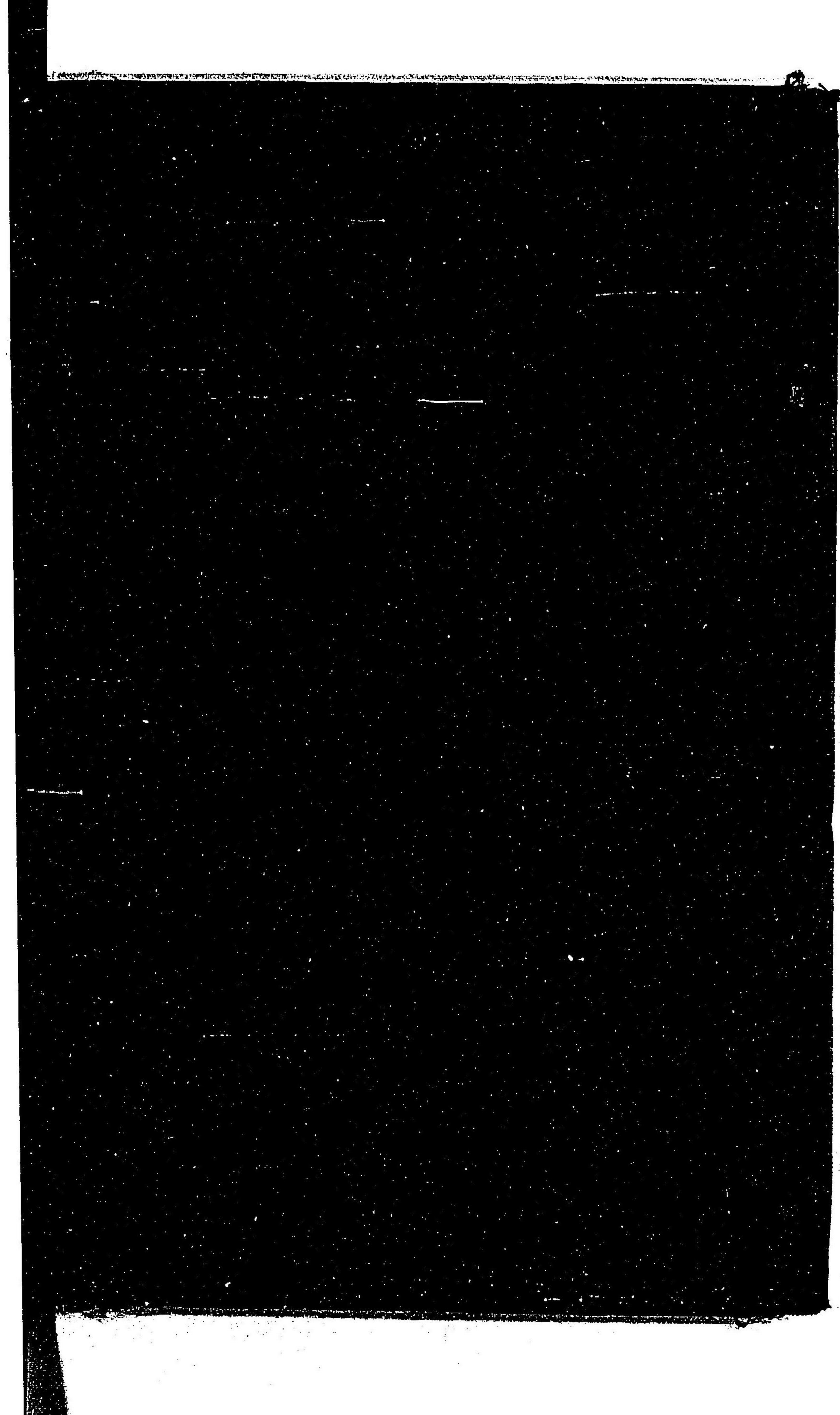
發行兼印刷者

著者

金港堂書籍株式會社發行教科圖書販賣所

同野澤	同甲斐國甲府	同武藏國浦和	同同川越	同同群馬縣	同同上野國前橋	同同高崎	同同富岡	同同下越前千葉	同同船橋	同同上越國東金	同同安房國北條	同同常陸國水戸上市	同同土浦	同同
(山梨縣)	(埼玉縣)	(群馬縣)	(千葉縣)	(茨城縣)										
岩下 袈裟店	柳藤正 書堂	高野幸三 堂郎吉	明水岩三 堂郎吉	高橋常平 藏	柴田清三 郎平	本田	多田	多田	多田	多田	多田	多田	多田	多田
同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同
(栃木縣)	(福島縣)	(宮城縣)	(山形縣)											
須藤市右衛門 兵衛	三田代三郎 泉堂	博田中善平 堂	博田中善平 堂	博田中善平 堂	博田中善平 堂	博田中善平 堂	博田中善平 堂	博田中善平 堂	博田中善平 堂	博田中善平 堂	博田中善平 堂	博田中善平 堂	博田中善平 堂	博田中善平 堂
同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同
(秋田縣)	(巖手縣)	(青森縣)	(北海道)											
鈴木喜八 助藏	成見清兵衛 進堂	東海林重太郎 繁次	柳田繁次	柳田繁次	柳田繁次	柳田繁次	柳田繁次	柳田繁次	柳田繁次	柳田繁次	柳田繁次	柳田繁次	柳田繁次	柳田繁次
同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同





85
111

(M)

003375-000-1

86-111

東洋史略

辰巳 小次郎/著

M33

ACC-1884

